

橋史郷土史研究会要項

◎主題 橋瀬見城主波江氏の後期のころ(第十三代城主(公勢以後)

①日鼓城の落城(橋関係施設の衰亡も敗戦のためである)

②潮見城主第十三代公勢の頃は西佐賀で絶大な勢力を築き城も潮見城と日鼓城の二城を構っていた。

③勢力範囲も鹿島の原越後守 吉田城主の吉田馬大夫、白石城主白石道勝 多久城主多久太郎岸岳城主波多興信、から人質を取らる程である。

正妻は柄崎城主十七代職明の娘である。職明に男児が無かつたので長男純明は柄崎に養子にやつた。又吉田城主、岸岳城主の娘を愛し二男公政三男公親が生まれていた。公勢は公親を次の城主に指名していた。これは公政側の不満に存っていた。(大永七年三月十五日の悲劇の原因となった)

④この頃公勢は大番役のため出府しその帰路大津逢坂の肉で落城の悲運にあつた大村城主大村純伊に出合った。純伊は大村城再興を期し伊勢参宮に出たが金欠のため関銭がなく肉所に留置されていたのである。その事情を知った公勢は同情し金子を子之関所を通しその夜は宿舎でいろいろ話をきいた。純伊は縁者の裏切りで落城に追いまわられた話をきき同情して帰郷後援軍を出して宿敵を撃ち、大村城の再興を援助する旨を約束して別れた。公勢は帰郷後事情を調査し家来の中村公影、宮原能登守等を将として一八〇〇名の家来を付けて有馬尚登と戦い大村を再興して大村民を安堵させた。大村純伊は心の感謝し、今後の両者の親交のため中村公影を大村方の家老とて迎之波江と大村の親交の仲をとり持つ役目とさせたといふ申し出た。公勢はこれを許した。中村公影は大村姓をいたたき家老としてこの任務を果たした。

⑤大永七年三月十五日の悲劇

(一五七) ⑥公勢は公政公親と親子三人で蹴鞠を楽しんだ。三月十五日は旧曆で汗が出た。公親が水が飲しいいと言った。これを聞いた公政の乳母はかねて用意していた毒薬で毒水をつくり持つて来た。公勢は「年寄が先だ」と、先づ水を飲んだ。次は俺だ」と公政が飲んだ。公親は飲むことが出来なかつたのである。

公政の乳母はオロクするばかり、主母水の効果は「てき面」。公勢公政は苦み出した。
 (しかし、公勢は事情を察し従容として甲由月を帯し長刀を杖に、郎党を遣止め
 「我命運つきたり、この次にて日鼓山頂に埋れよ。又公親若年なればよろしく頼む。」
 と遺言して死んだという。

この噂を聞いた柄崎城の純明は全軍を集め日鼓城攻撃を始めた(親子兄弟
 が戦うのは戦国時代なればこそであらう。日鼓城は岸岳城の援助もあつたが城主が若年(15)
 では戦不利で救度の激戦の末落城した。

ゆ橋岡係施設がせりせれる。

日鼓城落城後貴明軍は潮見城、潮見神社、波江森、牛島森、中村、秋その他
 施設をせりし、文書を焼く等散々にせりし廻つた。

ゆ一族を散々になり公親は佐賀に隠棲、公師公重は熊本、菊池の談議所を坊さんの
 修業をすることにした、後橋氏の血筋と今かり山鹿重行、合志中務の保護を受ける
 (公師の妻は山鹿重行の姪、公重の妻は合志中務の息女である)

ゆ西佐賀、雄波江氏の没落による情勢の変化

ゆ潮見城の存在によって南方よりの侵入は防止されていたが南方軍の動きが直接柄崎へ
 響くようになった、特に波江氏の没落後有馬は諸將と語り、柄崎攻撃の動きを
 見せた

ゆ貴明は潮見城を日に復し有馬にあたるせ自分の安全を守ろうと考へた、

ゆ貴明は公師が菊池に居ることを知り再び潮見城の守りにつくことを説いた

ゆ公師公重は貴明の請三聞き、再び潮見城の守備につけることを喜んだ、各地に散在して
 いた波江の武士も喜んで集結、公親も加わり一行三名潮見城に入城、城を整之守りにつた。
 日鼓城落城より三十三年月、公親四十五才、公師三十四才、公重二十才である

貴明は南方守備について話し合い、一旦緩急の場合の救援を約束した

ゆ菊池の山鹿重行合志中務の協力があつたことは勿論、装備の点も大変心配をかけた
 。この時潮見城に鉄砲が搬入された鉄砲伝承は天文十二年(一五四三年)である。
 種ヶ島は橋公業の所領で戦国時代まで維持することは困難と思われ、知人工人を

頼り鉄砲を入手したものであろう。

(7) 潮見城の落城

(7) 鉄砲破棄の謀略

永祿三年(六年と二説あり)武雄提子河の婦人が城門に来て生箱をのみ踊り狂って
 「吾は潮見大明神なりこの城を守護すること數百年に及ぶしからにこの城を鉄砲
 を以て守るとは何事ぞ急が鉄砲を城外に出すべし若し敵襲あらば神力を以て
 追ひ拂うべし」と神がかり約石踊りまがどり宣言した。

これについて城中では協議が行われ「敵を眼前にしてこの言葉は信用できません」と言う
 意見が多かつたが公親は「一旦落城した城に入城できたのは神助ではなにか。この
 婦人のことは信じよう」と言う意見が通り鉄砲は城外に持ち出された
 その後有馬の攻撃は猛烈とさわれ公重外戦死者多く城は落城した

公師は武雄廣福寺に入った貴明に戦況報告をし今後の指示を受けようとしたが
 遂に合之存かつた公師は公勢時代の太村との親交をたより太村に下つて
 保護を受けた。(柳崎城からは約束の支援もなかつた)
 公師は後で波佐見岳の山城の城主として太村氏に仕えた

公師は後千綿で一生を終った。波佐見には波江氏の子孫も多く住む
 橋史関連の史跡も多い